
住・まちづくりフォーラム かわら版 (仮題)

ニュースレター 第8号 1995年 8月25日



特集 第8回住教育フォーラム

『遊び場の住まいまちづくり学習-昌険遊び場プロジェクト』

発行/財団法人 住宅総合研究財団

8

第8回 住教育フォーラムの記録

主催 (財)住宅総合研究財団 住教育委員会

テーマ 遊び場の住まいまちづくり学習 —冒険遊び場プレーパーク—

- ・日時 1995年6月2日(金) 午後6時～午後9時
- ・会場 当財団会議室
- ・講演 天野 秀昭 氏
下中 菜穂 氏
- ・コーディネーター 熊本大学工学部教授 住総研住教育委員会委員長 延藤 安弘
" 東京学芸大学教育学部教授 住総研住教育委員会委員 小澤紀美子
- ・ファシリテーター 千葉大学園芸学部助手 " 木下 勇
" 筑波大学附属小学校教諭 " 町田万里子
- ・記録 跡見学園女子大学短期大学部助教授" 加藤 仁美
- ・参加者 建築系・教育系などの研究者・実務者、並びに大学院生・学生、まちづくりなどの活動家、関心のある主婦の方など32名



次回予告は裏表紙に

- ・この「住・まちづくりフォーラムかわら版」は、住教育フォーラムの開催記録を仮にまとめたものです。将来、何回かのフォーラムの成果と、各委員の皆さんによる研究論文を合わせて、書籍として刊行する予定ですので、ご期待下さい。
- ・また、次回フォーラムの案内状も兼ねています。裏表紙をご覧ください。
- ・表紙デザイン、裏表紙カット＝町田万里子
- ・編集・文責＝事務局 間宮昭朗、小菅寿美子、平井なか

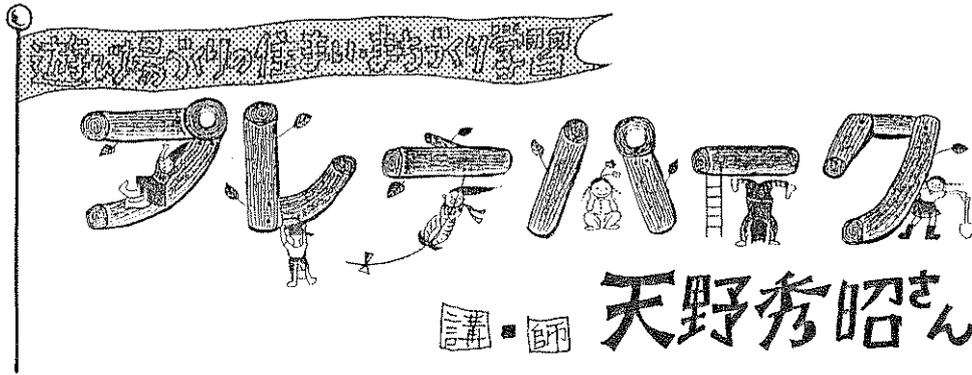


小澤 ■「遊び場の住まいまちづくり学習」というテーマで、実践的にやっておられる天野さんと下中さんのお2方にお話をお願いしております。学校教育だけでは足りない、やはり幼児期から、地域の中で仲間と一緒に遊び、あるいは縁に触れるとか、そういう体験を通して子どもたちは育っていくのだらうと思います。そういう意味で、今日はご体験の深いお2人の方から、子どもの目線に立ったお話が聞けるのではないかと思います。木下さんから、お2人のプロフィールをご紹介します。

木下 ■まず、下駄がトレードマークの天野さんですが、プレーパークの初代のプレーリーダーで、東京都世田谷区の3つのプレーパーク、羽根木公園、世田谷公園、駒沢公園のコーディネーターもしていらっしゃいます。「プレーリーダーとは遊びの環境デザイナーだ」と天野さんは言われていますが、素晴らしい、いい定義だと思います。現在、世田谷の3つのプレーパークを中心に、子どもの遊びやすい環境づくりを目指して、ハード・ソフトを含めて飛び回っていらっしゃいます。

一方、下中さんは、東京都大田区の「くさばら公園」という、世田谷のプレーパークとはちょっと違う公園を、手探りでつくっていらっしゃいます。役所との対応も初めてで、戸惑いと感動を感じておられるというお話を、以前新鮮に語っていただいたことを記憶しております。ご自身、造形作家で、くさばら公園ではかなり感性的なアプローチで、いろいろな面白いことをしている。それを通信でいろいろの人に情報を発信しておられる。非常にメッセージ性にも富んでいていつも感心しております。

今までのこのフォーラムでは、子どもの姿が見えないという議論もありましたが、今日は思う存分出てくるのではないかと思います。



プレーパークのことを最初に簡単に言うと、元々住民の親が、我が子が遊ぶ様子を自分の昔の体験となぞらえた時、ちょっとおかしいんじゃないか、自分の頃と随分違うと疑問を持った、というところからスタートしているのです。ヨーロッパの「冒険遊び場」のことを知り、親たちが、こういうような遊び場を自分たちの手でつくっていかうというところから始まったものです。

1979年、国際児童年の年に、それまでやられていた住民たちの遊び場づくりの取り組みを、世田谷区が採用して、国際児童年の記念事業として誕生したのが羽根木プレーパークなのです。しかし、役所というのは、何か起こった時の責任問題をすごく気にする所です。行政の方が直接運営を担当してしまうと、その辺の問題が出てくるだろうということで、それまでの自分たちの体験から、場所と資金の面については行政が持ち、運営そのものは住民が責任を持って行うという形を作り上げていったのです。今世田谷区内には3カ所プレーパークがありますが、すべてがそういう形でやられています。

プレーパークは、登録制のプレーパークを支える会、「羽根木プレーパークの会」「世田谷プレーパークの会」「駒沢はらっぱプレーパークの会」という3つの組織と、それぞれの地域住民によって構成されています。ただプレーパークは、会員でなければ使えないというものではなく、これらは、支援しますよという人たちの会です。1年に1回、総会を開きそこで世話人というのを選びます。その世話人が月に1回、世話人会というのを開いて、プレーパークの運営に関してはほぼ100%決定していくという形をとっています。もちろんパーク内で起こったことについても、その世話人会が対処に当たります。

もう1つプレーパークで特徴的なことは、プレーリーダーというのを置いている点です。プレーリーダーというのは、先ほどの「遊びの環境デザイナー」という側面を今でももちろん持っていますが、それよりもっと多様な役割を担っていると思います。遊びの現場に常について、子どもの遊びと付き合う役割を持っているような人間として配置されています。今それぞれの遊び場に2人ずつ有給のスタッフとしています。だから常駐のできる人間ということですが、きちんと職業として成り立っているかということ、まだなかなかそこまではいっていない。もらっているお金というの、ボランティアに毛が生えたくらい、最低必要限度くらいですが、その意志の非常

に強い青年たちが、「お金の問題じゃないよ」というところがかかっています。そういうのが2人ずつ、3カ所所で6名おられます。そのプレーリーダーと世話人が月に1回世話人会を開き、その中でいろいろ検討しながらプレーパークを進めている、というやり方をとっています。

役所で事業を担当しているのは児童課で、囲まてたどっていくと厚生省です。もう1つ大事なかわりを持っているのが、地主である公園で、これは建設省です。この2つがプレーパークに直接的にかかっています。児童課は、プレーパークを世話人が責任を持ってやっている分には、何も言わないわけです。利害関係をどこ一番持つかということ、やはり公園課です。都市公園法という法律があって、その都市公園法からみで考えると、プレーパークというのは一体どのポジションにいくのかというのは、常に話題をふりまいてきました。その辺については、世田谷区の公園課の人は、常に苦しい立場を迫られていた可能性があるのですが、そういうことなども含めて、今日は考えていきたいと思います。

遊びの環境デザイナーという視点から、プレーリーダーというのか、プレーパークとのかかわりを語る部分が1つあるわけですが、もう1つは「子どもの遊びって何だ」というところからも、もちろん出せるわけです。遊びというのは何だ、というところが前提にないと、何のためにデザインをするのかということが出てこないはずなので、本当はその部分をやりたいと思うのです。

遊びにはいろいろな要素があるので、これだけではないのですが、1つ、はっきりと押さえておいた方がいいと思うのは、遊びというのは型ではないということです。子どもの遊びを型で計ろうとすると、とんでもない間違いを起こします。ここでは「子ども」というふうにつけるのをやめて、「遊び」というふうにしましょう。遊びを形で計ろうとすると、とんでも違うことが起こってくる。

僕は、今まですごく失敗したなと思うことがあって、それが僕にとってすごく大きな教訓になっているのです。友達を連れてくるでもなく、下校時にいつもランドセルを背負ったままプレーパークに通って来る子がいたのです。雨の日も風の日も、1日も欠かさず毎日来るのです。声をかけても返事もしてくれないけれど、ずっと小屋の前に立って中を見ているのです。僕は気になって、ある時「よく来るね」みたいなところから話をし出して、初めて会話らしい会話がそこで交わせたわけです。僕は、

すごくそれが嬉しくて「そんなに動物が好きだったら、動物係をやってみないか」という話をしたのです。

プレーパークには、子どもで動物係なんていうのは1人もいないのですが、その子がほかのことには興味を示さず、動物にだけ興味を示しているわけで、その子の世界がそこから何か開けないだろうか、というのが僕の中にあつたのです。その子は「えっ」というような顔をして、翌日から来なくなりました。

そのことが、いつも気にかかっていたのですが、「あっ」と思い当たったわけです。動物係というところから、彼は一体何をイメージしたのだろうか。飼育当番というふうなものにとらえたと思えば、明日も明後日も、毎日ここに来て餌をやらなければいけないと思ったかもしれない。彼のそれまでの行為というのは、来たいから来ていた。朝起きて、「今日も寄ってみよう」みたいな感じで来ていたわけです。ところが、そういうことを言われたことで、明日も来なければいけないという気持ちがわいたとすると、これは仕事の領域に入ってくる。

行為で見てしまうと、毎日来ればいいというような行為は、係をやらせようとして遊びであろうと、それまでのその子にとっては変わらないんだけど、動機が変わってくるわけです。動機が変わると、同じ行為でも遊びだったり、遊びじゃなかったりするわけで、そのことを気づかなかつた自分に対して、しまったなと思った出来事だったのです。その子の一番の楽しみ、ひょっとしたら唯一の楽しみを奪っちゃったとしたら、その子に対する犯罪に近いという気もしてしまつたわけです。それ以来、僕はそういうことを常に気をつけるようにしています。

例えば、伝承遊びというのがあります。お手玉とか、ケン玉、おはじき、あや取りとかがあります。あれは、ある一定のルールがあって成り立っていると言えば確かにそうですが、あのルールは普遍であるとは限らないわけです。こうやって遊ばねばならぬというのはないのだけれども、大人が伝承遊びというふうに決めると、どうもこうやって遊ぶもの、という伝え方をしがちです。例えば日本ケン玉協会みたいなものがあるって、そこでケン玉の技に関して、ここまでできたら何段とか、この技ができたらすごいんだとかということで、認定書まで出しているわけです。僕は、あれを競技として大人がきちんとやっているのなら、全然問題はないと思うのです。でも、それを子どもの遊びだというふうに思うと、子どもの遊びは確実にスポイルされていく。何ができたなら何段だというような決め方は、決してケン玉の遊びの本筋ではないはずなのです。ケン玉の遊びの本筋というのは、ひょっとしたらみんなで持ち寄ったケンを集めて、並べて、玉を転がして倒すことかもしれないのです。それも遊びの世界ではありなんです。

それを、ケン玉というのは、こういうふうにするものなんだよとか、ケン玉にはこういう技があるんだということ、その難易度を大人が計って段位を与えるとすれ

ば、これは明らかに競技なのです。到達度をはっきり出すわけでしょう。行為そのものを楽しむというのは、またレベルが変わってくるわけです。「ケン玉というのは、こうやって遊ぶものだ」という型をそこではすごく問題にしているわけだけれども、それが遊びであるというふうに言い切ってしまうことは大変危険なことなわけです。けれども、そういうふうに通じ合っている大人がたくさんいて、例えば子どもの遊び場だとか、そういうものも「子どもの遊びというものはこういうものだ」とみたいな視点から入って行って、そこからの場づくりだと何かとかということを考えてみると、これも大きな間違いが起こってくるわけです。

遊びは、本当に形を変えていくし、いろいろな条件によっていくらかでも変えられるわけです。2人でやる時の遊びと、5人でやる時の遊びと、10人でやる時の遊びと、同じ遊びでもどんだんルールが変わっていくわけです。年齢が同じ場合と、異年齢が入っている場合とか、幼児が入っている場合とか、これでも全然ルールが変わってくるわけです。そういうような柔軟性があるからこそ、いろいろな子どもたちが一緒になってかかわれる知恵が生まれてくるわけだけれども、型に入れてしまうと、それ以外の者は受け入れられなくなってくるわけです。

良い例は子どもたちの野球です。野球をやろうかという時、人数が足りない。僕たちの頃は、野球をやろうかという時、やりたい奴だけで、それだけの人数でやっていたわけです。それが、今は人数が足りない、9人いないと野球はできないということになる。これは、競技としての野球でしょう。次に出てくるのが、場所がないとできないというわけです。僕たちが野球をやろうかという時、手に持っているのは軍手だったりする。軍手をどうするかというと、軍手をまるめて、ガムテープでグルグルと巻いてボールを作る。それが、今はボールがないとかいろいろ出てくるわけです。

子どもたちの遊びがどんどん競技化されていく。ルールというの、全国統一の公式戦のルールにみんななっちゃう。野球のルールというの、3アウト・チェンジとか、幼児だから3振してもあと2球おまけとかはないわけで、ルールはルール、人によって変わらないとか、状況に応じて変化はしない。これは大変固い話でしょう。大変固いお話というのが、実際に子どもたちの遊びの中を、今いろいろな形で覆い尽くしてきている。

お固い話に絶対的に拍車をかけていると思うのは、しょっちゅう言われている偏差値です。これは、子どもたちの能力をある断面で、はっきり序列化していく、点数化していくわけで、それに対して子どもたちは有無を言えないわけです。80点の点数をとった者と、40点の点数をとった者と、2人並べて「さあ、どちらの子が頭がいい」と聞いたら、すべての人間が80点の方を指すわけで、80点と40点の落差というのは、明らかなわけ。それは、全国各地どこへ行っても、そういう形で序列が進んでいるから可能になることなのでしょう。型ではないといふところから入ってきているのだけれど、他方、世の中でどんだん進行しようとしているのは、この型をどうやって作るかとか、このシステムにどうやって当てはめていくかとか、序列化をどうやって不公平な形でなく進めていくかとか、そういう形になっているわけでしょう。そのために全国統一の試験がやられたりする。

でも、それはもう片方でものすごい功罪を生んでいる。例えば、「桜はいつ咲きますか」に、北海道の人は「5月」、沖縄の人は「2月」というふうに見えるのが普通だと思うのだけれど、答案用紙にそれぞれのことを書いていたら、正解がなくなってしまう。答案用紙に丸をつけて点数化するためには、すべての答えを統一化しなければ



いけない。だから全国均一のルールが、統一のルールが必要になってくる。さっきの野球をやろうといったら、競技になっちゃうのと似たようなものだと思います。

オリンピックをみんな浮かれてワイワイ見ているけれど、オリンピックの罪悪というのも大変なものです。あのルールでないとその競技でないということが、遊びの中まで入り込んでくると、楽しめなくなるというか、カチンカチンになっちゃう。その辺のところを片方で、危険性として押さえないと、子どもの世界が均一化されていってしまう。その結果として、いろいろな状況や構成要員の変化に応じて、子どもが自由自在にルールを編み出していくというような能力が、次第に損なわれていく。

それは、場の問題も同じだなと思っている。大体、遊び場というのはつくられたら変わらない。やはり、その遊び場の型を維持するわけです。大体、コンクリートとか鉄とか、そういう素材でつくっていますから。けれども、本当だったら、子どもの遊びが状況に応じて変化するように、遊び場そのものも変化していく必要があるのではないかと、というふうに思っているのです。

プレーパークは、そういう意味では完成された場所ではない、完成されることが永遠にあり得ない。1年前のプレーパークと、今あるプレーパークで、同じ遊具もあるけれど、違う遊具もある。要するに、場自体が常に移り変わっていくということもあるし、そこを支えていく人たちのやり方や、ちょっとした考え方の違いでも、場は移り変わっていくわけです。場というのは、やはり表現の場であるわけです。何のための場であるかということ、遊びの表現のための場であって、そこで遊ばせてもらうための場であってはならないはずなのです。要するに、遊びたいと思う人間が、表現できるだけの、それだけのキャパシティを持っていないといけない。

上映したビデオに出てきた竹トンボおじさんは、羽だけ飛んでいくような竹トンボを100m以上飛ばします。そういうような大人にとっても遊びが、十分堪能できるというか、楽しめる場になっている。それを許容できるような場を、どうやっていったらくれるのだろうかというのが、一番大事なんじゃないかという気がするのです。

やはり僕は、遊び場づくりというのは人づくり、というふうに思っている。環境デザインということ、もちろん具体的に子どもたちの遊び心を刺激する要素というのはいくつもあって、そういうものを適度に、どこかに置いておくというのは悪いことじゃないと思うけれども、使うか使わないかは明らかに子どもの自由なわけです。大事なものは、そういうものを準備させることができるかどうか、社会的な許容性があるかどうか。だからここまできると、人間の問題だと思うのです。自転車が何台もある。それを分解して新しい自転車を作っていく、なんていうのは子どもは大好きでよくやるんだけど、使える自転車を分解して新しい自転車を作る、なんていうことは許せない、というような人も中にはいるわけです。2台つぶして1台作るということになれば、1台減るわけですから、もったいないと言えば確かにもったいない。禁止をするのではなくて、どういうやり方があるのか、ということであればまだいいわけけれども、要するにその行為自体がいかん、という話があったりもする。

もっと言うと、例えば子どもが水を流して水遊びなんかをしていると、水がもったいないからやめろ、という声が入り込んでくるわけです。もったいないという人の気持ちもわからないではないけれども、そういう声が強まってくれば、子どもは水という素材があっても、水遊びはできなくなる。そうすると、何が準備されているかが問題なのではなくて、根本的には、子どもの遊びをどういう視点で見ているかとするのか、というような人の視線というか、視点の方が、ずっと問題なわけです。



その辺のところを、僕は子どもたちとやり合いながら、どういうふうに築いていこうとしているのか。そこが、僕に言わせると最もデザインの上では不可欠の要素というか、デザインをする以前のベーシックな問題なのかもしれないけれど、永々と続く問題だと思うのです。最も子どもの遊びを伸ばしていくために重要な要件というのは、やはり人的な人の環境みたいなものを、どう整えていくのか、というふうなところだろうと、思っていて、そのために自分たちは一体何ができるのだろうか、という辺りのことをいつも課題にしているわけです。

資料の「冒険遊び場の中の安全」には、子どもにとって安全とか冒険というのは、一体どういうことなのかということを書いています。今の公園というのは、安全対策という言葉を使っているけれども、子どもが遊ぶための安全対策というよりも、責任を問われないうための安全対策、と言った方が適切なのではないかということだと思います。遊ぶためにつくられる場所という言い方からすると、責任を問われないうための安全対策を講じているとすれば、これは本末転倒としか言いようがないということだと思います。

自分の責任で自由に遊ぶということ掲げてやってきて、ある時羽根木公園の別の場所で起こった事故について、所長がお見舞いに行った時に、おかあさんが「いいんですよ、うちの子の責任ですから」と言ってくれた。そんなことは、公園の生活の中で初めてだったわけです。所長は、「プレーパークのことが根づいてきているのかもしれないね」と言ってくれたので、僕はすごく嬉しかった。自分の責任で自由に遊ぶというのは、役所は言えないわけだけれど、住民なら言えるわけでしょう。住民なら言えることを、住民たちにどんどん言わせる。責任追及といった問題ではなく、自分たちの生活課題として、自分たちが見直していこうという機運を作っていくことは、公園自体をもっと使いやすくしていくことにつながるのではないかと、思っているのです。

公園課とは、プレーパークはしょっちゅうぶつかるという話をしたけれども、プレーパークが本当にやらんとすることを進めていけば、確実に公園の方に利が落ちてくると僕は思っていて、「公園のためにもなるんだから、プレーパークに好きなことをやらせて」というふうに言っているのです。



▲当日配布された資料

私は、新参者で活動をはじめからまだ4年ぐらいです。私たちが公園を始めた時には、もうすでにプレーパークがあって、メンバーの中の何人もが、プレーパークで実際に遊んだことがあって、いいなと思いつつも「何でたき火をしにわざわざ世田谷まで行くの」という素朴な疑問を持っていたのです。要するに、親が連れて行ってくれないければプレーパークまで行けないという状態は、子どもが行きたいからぶらっと行くという気持ではないのです。大人の都合に合わせて子どもは「自由」を求めて遊びに行くという妙な状態があるわけです。その辺のディレンマに悩まされていたのが、私たちの状況だと思うのです。

くさっぱら公園は、はっきり言って子どものパラダイスではないです。私たちが今考えていることとしては、くさっぱら公園では子どもは主役ではないです。子どもの遊びということは、メインにはない。

今まで遊びだと思っていたものが、ある時、制度化しちゃうと、バツと遊びじゃなくなっちゃう。楽しさが消えちゃう。これは、子どもだけじゃなくて大人もそうだと思うのです。私たちは、毎月『今月のくさっぱら公園』というのを出しているのですが、これを書くのが楽しくてやっているわけです。ところが、これが義務になると、突然仕事になっちゃうんです。いずれにせよ、誰からもお金ももらってなくて、私たちが好きでやっているという気持を維持しないと、これは遊びじゃなくなる。維持しようという、ちょっと複雑怪奇な遊びになっちゃうんですけれども、要するに自分が楽しくなくなっちゃったら、いつ辞めてもいいというスタンスを、いつも持ち続けていたいと思っています。

くさっぱら公園というのは、天野さんたちのような制度と志でのプレーパークではないけれども、公園をつくりつたり、つくり続けていくことが大人の遊びなんじゃないかな、ととらえているのです。原っぱで泥んこ遊びをすることも楽しいかもしれないけれど、もう少し社会的にインパクトがあることをやるのが、大人の持っている力を発揮できる遊びなんじゃないかと。例えば、自分の考えが行政に通るとか、実際に公園ができちゃうとか、そのこと自体を遊ばないと、自由を維持するための仕事というのが発生してきちゃうような気がしています。

くさっぱら公園は、大田区にあります。羽根木は、大きな公園の中の一部という形になっているのですが、くさっぱら公園は1,300㎡という小さな公園です(図1)。だから、より多くの子どもが置かれている現実、近いと思います。プレーパークと若干の違いがあるとしたら「ここでは自由よ」というものを作るんじゃなくて、普通

の公園を、考え次第で自由な空間にどうしたら変えていけるかという、ゲリラ的な試みではないかと思っています(図2)。スライドでお話を進めたいと思います。

大田区の池上線の千鳥町という所にあります。うちのすぐそばなのですが、木造のアパートが解体されて、突然「大田区公園課、公園予定地立入禁止」という看板が出ました。「普通の公園になっちゃうのはつまらないな」という気持ちで、公園課の人に電話をしたのが発端です。電話に出たのが大田区公園課の鈴木さんという方でその時の電話でプレーパークの話



題も出ました。「プレーパークって知っていますか」と聞いたら彼は知っていて「あんなものでもいいのかな」と言ったら「いいんですよ」と言ってくれたのです。共通のイメージで初めての人と話をすると意味では、プレー

パークの存在が大変に役に立ちました。彼と電話で話をして、この人とは話せるんじゃないかと思ったので、実は私は、「やるう」と決め、何人かの仲間に声をかけて、その日のうちに20人ぐらい集めました。

まだ予定地のうちに「ともかく中に入って遊ばせてよ」という話をしたのです。それはすごく異例なこと、要するに管理する人のいない所に勝手に入るというのは非常に無理な、行政の中ではなかなかできないことだったのです。でも鈴木さんは、そのサクに鍵付きのドアを付けてくれて、「ここから入るならいいよ」ということになったのです。でも鍵は、1回ぐらいしか使いませんでした。結局、みんなすき間から入って遊びました。その場所遊びながら、ここがどういう場所になって欲しいかというのを仲間で考えました。普通、公園をつくりたりするワークショップなどがありますね。

この前、生協の人たちに呼ばれて話をしたのですが、生協の人たちは、まちづくりのことをやっていて、ワークショップをしていました。みんながどういう公園が欲しいか調査をしている。世の中では普通そういうふうにするんだなと思ったのですが、私たちはそういうことはしなかった、自分は何が欲しいか、ということここで考えるということになりました。そこが違ふとその時気がついたので。人はどうかということよりも、本当に自分は生活の中で何が欲しいのか、というのは改めて考えないとわからないし、みんなが欲しいものを作ろうというのは、行政とか企業の発想だと思うのです。だから、むしろそういう発想はしなくて良かったのかなとも思いました。

予定地で1週間のお祭りをしました。お祭りの時のみという期限付きで許可をもらって、「誰かがいつもいますよ」という形で、砦を作りました。構築物は作ったら危険という、どこにでもある理論で、なかなか作らせてもらえないのですが、あえて作りました。こういう公園ができたらいいなというイメージを描いて張ったり、真面目に行政との話をする会もしました。その1週間の祭りは、いろんな人が来る。祭りという何かイベントをしているイメージですが、そうではなくて1週間そこには人がいるということで、おばあちゃんも来て話をします。要するに、私たちの地域では、こうやって人の顔が見える関係は今までなかったのです。それが、ここに1週間居続けることで、やっとちょっと見えてきたかなというのが、この時の良かったことです(図3)。

私たちは、企画書というのを作りました。あとになって、公園課の鈴木さんが「あの企画書がよかったよ」ということを言っていました。役所という機構の中では共通言語として、こうしてくださいという手紙ではなくて、全体を考えた企画書があったことは、その気になった行政マンにとってよかったのだと思います。住民の方でも、形になりでき上がったことで、すごく元気になりました。



講師 下中菜穂さん



図1 現在のくさっぱら公園

これも大人の遊びの一種だと思うのです。自分たちの考えを、あだこうだと言っている段階だと、たくさん人がかかわる。そうすると、そのお互いの考えが矛盾することが当然ながらあります。でも、それを書いたものにして、みんな練っていくということは、自分たちの考えを煮詰めていくことになるわけで、それができたということは、みんなも達成感があってよかったんじゃないかと思います。

工事が始まり、草は一度なくなりました。3つの柱をその企画書であげました。1つは、このエリアに小さな自然を戻したいということ。もう1つは、プレーパークでもうたっている禁止がない場所であるということ。それは、何をやってもいいということではなくて、自分の頭で考えて判断する場所。それさえも普通はなくて、余計なお世話の「何々をしてはいけません」という看板が立っています。それはなしにしようということが2つ目です。3つ目は、この公園には完成はないんだ、つくり続ける公園なんだということをうたいました。

実をいうと、その3つ目というのは、公園課とデザインをする人とのやり取りというのが一筋縄ではいかなくて、自分たちの思ったイメージを伝え切らなかったり、いろいろありました。変えるということについて、だんだんそのウエートが最初の2つよりもずっと大きいということが、やりながらわかってきました。

そして、くさっぱら公園は開園しました。くさっぱら公園という名前をつけてよかったなと思ったんですが、草が生えなかったのです。でも、何となくくさっぱら公

園だから草を生やそうという気持ちになります。

よく公園内の看板に「サッカー遊びはしないでください」「花火はやめてください」と書いてありますが、くさっぱら公園のは白いんです。白いけれどあるんです。これも鈴木さんの苦肉の策じゃないかと思うのですけれど。取りあえず作った。「でも、下中さん、書かないからさ」と言うんです。それはいいやと思ったんです。初めは、プレーパークのことを知っているから、「ここは自分の責任で遊ぶ場所です」みたいなことを書くのかなと、みんな何となく思っていた。だけど、やっているうちに、それさえも書くのはやめようかという気持ちになったのです。よく何々しちゃいけませんという看板のいちばん最後に、「仲良く遊びましょう」と書いてありますが、余計なお世話だなと、ムッとくるでしょう。そういうことってすごく多いと思うのです。多分、子どもはこうあるべきとか、こうならいいなみたいな大人のイメージで、良かれと思った要らぬお節介りなものはしたくない。自分の責任で遊ぶというのも、書かれなくてもここでそういうことになるのがいちばんいいね、という、何となくそういう仲間の間の気持ちがありました。

くさっぱら公園が最初できた時に、多くの人が「なんだ、普通の公園じゃない」と思ったんです。

掲示板を立てました(図4)。掲示板も、普通、街の中で無許可で何か貼れる場所ってないのです。自治会なり行政なりの判子が要る。これは、私たちの企画書にもととあったんだけど、何となく認められちゃいました。今のところルールを明らかにしなくても、そんなにひどいことになっていません。

道具小屋もつくりました。できた時には、やっぱり近所の方は、「あそこは死角になるじゃないの」と言いました。でも、それにあまりきちんと対応しませんでした。確かに、この裏でタバコを吸っている中学生もいたし、エロ本を読んでいた子もいました。だけど、それぐらいいいんじゃないのって、かえって応援する気持ちを私たちは持ちました。ただ、あまり吸いながらひどい時に、「吸いすぎに注意しようね、鈴木君」という手書きのポスターを貼ったのです。鈴木君だったかどうかかわからないんですけど、名指されたのが効いたのか、少しましになりました。

草が生えなかったんです。ダスト舗装はもちろんしなかった。初めに公園課はクローバーの種をまきました。でも、クローバーって踏みつけにすごく弱くて、踏みつけた所はほとんど全滅、木の周りだけ残りました。

くさっぱら公園は、毎年恒例の種まきがあります。初めは、やはり普通の在来種がいいなと思ったのです。西

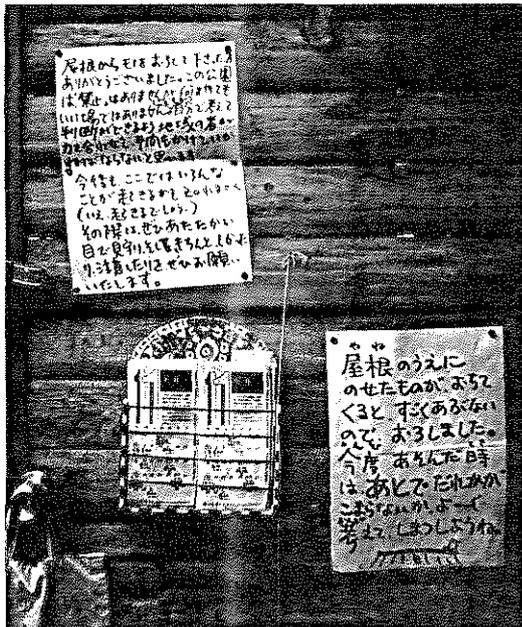


図2 道具小屋にはられたメッセージ

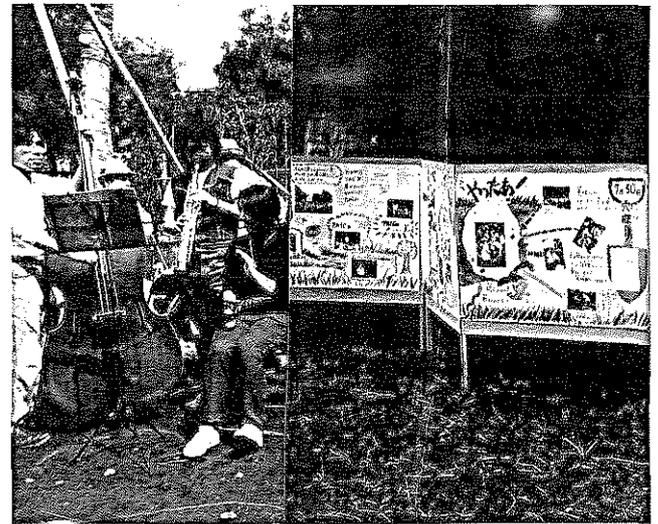


図3 公園予定地で開かれたお祭りの様子

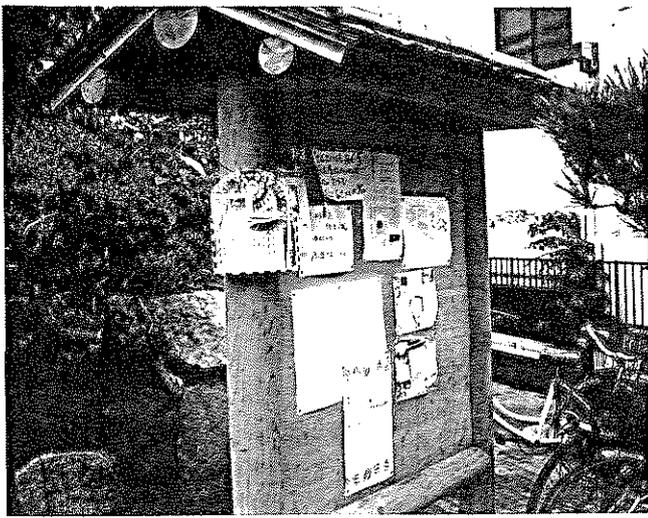


図4 公園内の掲示板

ドイツでは在来種の雑草の種を売っているらしいのですが、日本では売ってなくて、結局、牧草の種を買いに行ったのです。牧草なら稲科だから踏みつけに強いだろうということでまいてみました。ただまいただけだと、やっぱり踏みつけられる所は駄目なので、囲いをしています。囲いを勝手にして、「ちょっと待ってね」という看板を立てて草を生やしました。でも、草がなかなか生えなかったということは、とても良かったと思っているのです。いろんな人がかかっているのですが、みんなが植物のことに詳しくったり、生き物が好きだったりしたわけじゃないんです。だから造園業者がここまでをやってくれちゃっていたとしたら、こういう作業を通して、「えっ、雑草って全然生えないんだ」とか「えっ、クローバーってこんなに弱いのか」とか牧草をまいたけど牧草以外のものもこうやって生えてくるんだみたいなことを、実感として学べたというか、草のことをいとしいなと思えるようになったのです。なかなかうまくいかないというの、捨てたものじゃないと思っています。

みんな草っぱらにしたいと思って、いろんなことを進めてきましたが、同じ仲間の中でも、草の好み、イメージが違うのです。ある人はクルブシまで生えているのがいい、私なんかは、すごく高く生えるとかくれんぼができると思って、そういうのが好きなんです。だから、同じ志で集まっていたと思っていた人たちも、具体的なものが目の前に現れてくると、実は少しずつ意見が違うんだということが見えてくるのです。総論では、子どもは元気で、こういう所で遊ぶのがいいと、大抵の人が実は言うのです。木登りもしたほうがいい、穴も掘ったほう

がいいと思うんだけど、実際に汚なくなった洗濯物が毎日目の前に山積みになるとか、小汚ない子どもたちがここにたむろしているとか、ここで蚊が発生しているとか、本当に全部のことを呑み込んで、それでもこれがいいと言うかどうかは、やっぱりいろいろなんです。抽象議論じゃなくて、具体的なもので考えていけるといい、すごくいいチャンスを与えてくれたと思うのです。

植え込みにいっぱい草が生えています。これをどう思うかも、千差万別です。木がかわいそうだとか、取りたい、どうしても美学が許さないと思う人もいます。いろいろな考え方が共存しているのが、ここの公園じゃないかなと思うのです。要は、これを抜かないのがくさっぱら公園の方針ではないんです。抜いてもいい、抜いた人が勝ったりもするのは、地域の公園で、誰でも出入りできて、どんな考え方の人も拒否しない場所であるからこそ、逆に言えばくさっぱらファシズムみたいなものがここにあって嫌だなと思ってるということなのです。

それでも、あうんの呼吸じゃないんですが、みんなが何となく満足する、決める瞬間というのがくるのです。それが、なかなかおかしいと思います。

私たちは、この公園を一応清掃しています。週2回が原則ですが、よく忘れてサボったりもします。でも、それぐらいのいい加減さでも何とかこなせることがわかってきました。初めは「清掃を引き受けた方がいいよ」と言う鈴木さんに「えっ、清掃。うちも掃除なんかまともにしないのに、何で公園の清掃」とメンバーの大半が思っていました。「試しにやってみますか」と言う公園管理の人の提案で「じゃあ」と2カ月ぐらいのつもりでしたが、もう3年やっています。私たちの子どもが受け継いでくれるかどうかは別ですが、まあ続くと思います。

最初の話合いで、ベンチは移動式がいいと提案しました。移動した方が楽しめるし、お祭りをした時など、その時々場所に移動できればいいと思ったら「公園には移動するものは置けないんです」と言うのです。ベンチは脚の3倍ぐらい深く埋っています。ところが、だんだんに私たちは、動くものをどんどん作っています。

今のくさっぱら公園に来てもらえば、色々なものがゴロゴロしていますが、初めの頃はドキドキだったのです。動くものは駄目と言われていたし、もしかして、これで頭をぶつけて死ぬ人がいるから、そういうことを言うのかなと思ったりしちゃう。そして途中で反省したのです。私たちが管理者になってはいけない、行政の出先機関ではないと思ったのです。だけど気分としては、どうしてもこの公園を守りたいという気持ちが当然あります、自分たちが企画書を出してつくっているのですから。だから、もし事故があったらボジャるなどという気持ちでした。でも「何かちょっと置いてみない」と言って置いてみたら大

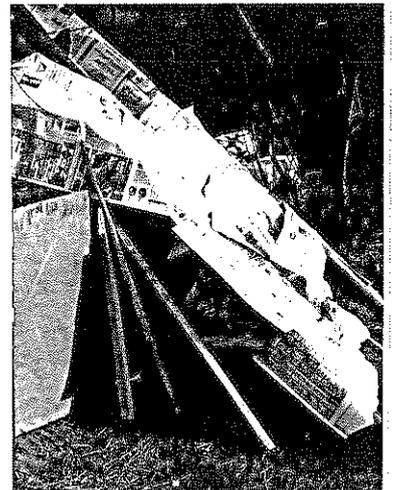
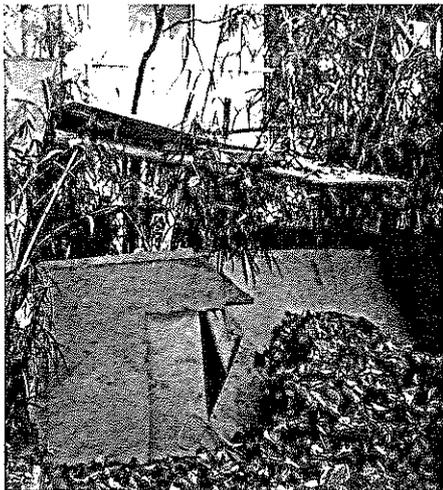


図5 子どもたちがつくった家

丈夫だった。ロープだって、初めは木からぶらさがっていたら、プレーパークと違って常に人がいませんから、私たちは好きだからほかの公園よりも人目は多いのですが、でもない時に何か起こるかもと言われたら、それはわからない。だからロープ1本で、明日子どもが首をつっていたらどうしようなどと思いました。

いろいろなことが少しずつやれるようになってきたんですが、炎のポウポウ出るたき火はできない。他のことは許せても火については許せないと思うまわりの人もいるんじゃないかというので、七輪どまりにしています。七輪で炭火をおこして何かするというのは結構やっていますが、たき火はやっていません。でも、そのうちやれるような地域にしたいなと思います。

実際に、たき火をして遊んだ跡を見つめます。まずいなと思いました。特に葉っぱがたくさんあるので。だけど、それも初め心配したわりに、落ち葉というのは思うほど燃えないとわかりました。でも、こういうのを見ると、思わず「近所の人が見つけないうちに消さなきゃあ」と思うのです。証拠隠滅を私がしてどう思うと思うのですが。そういうことから考えると、何が怖くて火はダメと言っているかという、大火事になることが怖いのではなくて、そういうことでこの公園がつぶされちゃうことを恐れている。ここで大火事になっても、まわりに類焼する恐れはないような気がしているのです。

池を大人が掘りました。不思議なんです、こういう水たまりがあると、みんな何かを投げ込みたくなるようです。オタマジャクシとかもいるのに、そうなるのです。だから、このくさっぱら公園に池ができるかどうかというのは、技術的な問題ではなくて、どうしたら社会的な問題を解決できるかということにかかっているな、ということはこの時に思いました。だから、池の夢は捨ててはいないのですが、まだかなっていません。

初めは、やっぱり今の子どもたちって遊べないのかなと思ったこともあります。プレーパークみたいに、常時、人をつけるということではできないのですが、例えば子どもが自由に遊べる日というのを作って、その時にプレーリーダーみたいな人として私たちがいてやろうかという案もあったのです。でも、何となくそれに対して、みんなあんまりスッキリしないものがあるというか、積極的になれないような気分だったのです。なぜかという、塾に行くのと同じ感覚で、自然遊び塾をやるつもりになっている大人がすごく多い。ここに子どもを突っ込んでおけば、元気印の子どもになるんじゃないかみたいな、塾と同じ発想、英才教育みたいな発想で子どもをくさっぱら公園に行かせる。私たちが月に1回そういうのをやったとしたら、そういう感じの子どもがドッと来そうな嫌な感じがしたのです。私たち自身は、子どもがいたりいなかったりするわけですが、そういうふうに子どもとかかわるのが、さっきの余計なお世話じゃないけれども、どうもスッキリしないのです。それで、子どもと遊ぼうというのはやめようというふうに思ったのです。

その代わりに、何か素材があればいいのかなと思って、初めは細い木の枝、大胆になった頃にいろいろ置き始めたのです。「やろう、やろう」と言って誘ったんじゃないで、大人が1つ作って自分たちで遊んだのです。それが多分きっかけになったと思うのですが、勝手に子どもたちが家のようなものを作り始めたのです。新聞紙をガムテープで貼ってあるだけ、プーフーウーの家みたいな、風が吹けば飛んでしまうようなものもあります。葉っぱで埋めて、あったかそうな家もあります(図5)。子どもたち自身が解体しちゃうものもあるし、別のグループが壊したりもする。子どもとしては「折角つくったのに」という気持ちを味わう、それもいいんじゃないかなと思います。

この公園はまわりに家があって、そんなに広くない。



図6 月1回開く行政の担当者との連絡会議

だから、ここでワイワイやっていると、やはり声が出るんです。祭りの時などは、「すみません、ご迷惑をかけます」と、まわり中に一応あいさつをします。遊ぶというのは、やはりちょっと遠慮もあるのです。でも、雨の日は声あまり通らない。だから雨の日の方が、飲み会をするにはいい。七輪があって、酒を飲んでいます。大人の遊びは、やはり酒が必要になる。そういう時は、子どもも周辺にいて大人もいて、何かわからないけどゴチャゴチャいるという感じです。こういうのも、大人が楽しんじゃって、すごく燃えるのです。いかにテントをうまく張るか、ちょっと技が要るのです。「任せてください」という感じで、私はブルーシートを張るのに習熟しました。そういうのを子どもが見ていて、自分たちで遊ぶ時に応用したりしているような気がします。

翌日まで、テントを撤去しないでいたら、保育園の子どもたちが、雨なのに遊べるぞと言って遊んでくれました。でも半日の命ですぐに倒されてしまいました。

つくり続けていくと言ったのですが、つくり続けるために絶対に必要なことがある。わからなかった行政が、公園とかかわることによって私たちは、少しはわかった。だけど、これで行政との縁を切ってしまったら、またお互いにわからなくなってしまうと思ったので、月1回、必ず管理所の所長さんを含めて運営会議をしましょう、ということ認めてもらったのです。それは本当にやって良かったと思っています。すごく困った議題が毎回あるわけではないんですが、月1回だけでも顔を合わせて、私たちの考えていること、また所長の困っていることと



図7 伐採木を使っていろいろなものをつくる子どもたち

かを話し合い、コミュニケーションを続けていくという
ことで、つくり続けていくベースができるのです(図6)。

ここの公園に関しての苦情が当然あります。今の世の
中では、それが所長の所に文句としていきます。その時
に所長さんは「こういうことなんですよ」と申しひらき
ができればいいとおっしゃるのです。だから、やはりそ
ういう会議をしていくことは必要だなと思っています。

公園というのは、すぐそばに住んでいる人にとっては
迷惑施設だと思うのです。確かにこの公園でも、ここで
こういうことがいろいろ起こっていて、プレーパークみ
たいに人が全然いないわけですから、前とか横に住ん
でいればハラハラのしどおしなんです。どうしようと思
った時に、行政を経由して苦情とか何とかがいくという
のが、今の世の中の在り方なんです。本当は当事人同士や
気がついた人、やった人という当事者の間で解決して
いたはずなんです。それを他人に下駄を預けてお任せして
しまっているというのが、私たちの公園をつまらなくして
いるんだなというのが、やっていますごく実感されます。

何かが起こった時に、しょっちゅう行くのは大変です。
大変ですけど、手間を嫌わずやる仲間がいる。それを
まわりの人だけに押しつけないということです。まわりの
人は見えてしまうから、かかわらざるを得ないでしょ
う。かかわらざるを得なくて憂うつになってしまうその人
を支える仲間がいないと、勝手なことをしてしまうとい
う空間は確保できないように、この都市の密集地帯とい
うのはなっているなというのがよくわかります。

土が非常に悪くて、アパートなんかを壊した時のガラ
の土のようで、泥遊びがしたくても、固いし具合が悪い。
そこで、地下を掘った所から土をもらってきました。

直ぐそばの共同団地で伐採した木を積極的にもらって
います。そして、これで遊んでいます(図7)。こういう
ものがあると風景がすごくやさしくなる。私たちが百の
言葉を費やして、ここはこういう場所だよ、こうしてい
んだよと言うよりも、その場所が力を持つというか
「もしかして、こういうことをやっていたのかな」とい
う気分の場所になるのが、私の理想だと思っています。

道具は自分で持ち寄るようにしようと思っています。
人から借りたもので地面を切ったりと、本当にずさんに
使う。そんなことをするのはとても嫌な気分がする。自
分で道具を持ってみれば、道具の大切さがわかるから
「なるべく自分で持ってこようね」と言っています。

落ち葉を公園などでは捨てているでしょう。羽根木公
園などでも、たぶんそうだと思うのですけれども、普通
はビニール袋に捨てているのです。それはすごく解せない
とずっと思っていたので、この公園では、大田区内の

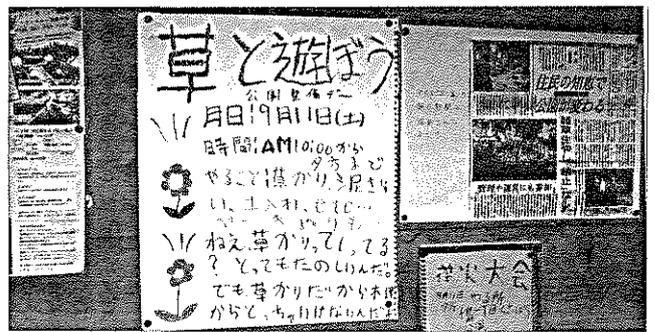


図9 「公園整備」のお知らせ

ものも逆にもらっています(図8)。袋を積んだ公園課の
車に捨てるのをやめて、くさっぱら公園に持ってきて
もらったのです。土が悪いといったこともあるのですけ
れども、どんどん入れていきます。これも、こうなって
いたら葉っぱが散るのではないかと、火事になるのでは
ないかという心配もあったので、少しずつやってみたの
ですけれども、しけているから、大丈夫そうな感じです。

ワークデーというのをやることにしました。この公園
は、作り続けていくという楽しい面もありますが、草の
手入れをしたり、いろいろなことで手がかるのです。
だから、その手入れをしようということです(図9)。何
をするかは自分たちで考えるのですけれども、大人、子
どもというのはあまり分け隔てなくやっています。

遊びって何なのかな、と思うのです。役に立つことと
いうのはとても楽しいから、大人は、きっとそれで遊ん
でいるのではないかと思います。

壊されたものを役所が取り替えていたのでは、全然や
まないと思うのです。ここでは、私たちが直しています。
ドアを壊したりするのは、誰がやっているかわからない
のですが、決していいことではないと思うので、その壊
してしまった子どもへの、メッセージのつもりで直して
います。「君たちは壊してしまったけれども、こうや
って直している人もいるんだよ」というのを、直された
ドアは、何も文字は書いてないけれども、無言で語って
いる、と私は思っています。これを壊した子が見たら「あ
っ、直ってる」と必ず思う。そういうコミュニケーション
というのはいいかもしいと思っています。

何度も言っていることの繰り返しですが、ごく普通の
公園がお話したような状態であることにに関して、いろ
いろ千差万別の考え方があって、それこそ網渡り的なこ
ともたくさんあるのですけれども、そういうものとかか
わらざるを得ないというのが自分たちの地域なのだ、と
いうふうに受け止めているというのが現状です。だから、
例えば、くさっぱら公園はどうしたらできるのか、とい
うことではなくて、やはり、それと付き合う気持がある
かどうかです。いろいろな考え方が出てくることに
結論を出すのではなくて、付き合っていくかというこ
とではないかな、というふうに思っています。

土は、放っておけばいろいろ生えてきて、いろいろ変
わったりしますよね。それをだんだんコーティングして
いく方向に、世の中が行ったと思うのです。土をダスト
舗装にして何も種やほこりが出ないようにしただけでは
なく、人間関係もコーティングしてしまっていた世の中
その土と人間の両方のコーティングをはがしてしまおう
というのが、この公園なのではないかと思うのです。

だから、子どもの遊び云々ということよりも、大人が
そういうことをやり始めることを、子どもも排除しない
で一緒にやっているという感じでしょう。自戒も込め
て、一見子どもの問題だと思ってしまう「困ったな」と
いう問題は、大人の反映だという気がするのです。やは
り私たちのやり方はこうではないかな、と思っています。



図8 他の公園から運び込まれる落ち葉

●種岡(都市計画同人) 特定多数の空間というものには賛成です。特定多数の人たちが、ある程度責任を持って空間にかかわっていくと、自然に、掃除なり、けがをしないようにする防護策とかを考えてくると思うのです。

○下中 2つだけ、面白いエピソードを話します。1つは、お年寄りとか、自治会のいろいろな方もいらした住民の説明会のときに、3つくらい案があったのですが、私たちの企画書がほぼ通りかけたとき、「ゲートボールもしたいんだけど、これじゃ、できないね」と言ってお年寄りがいたのです。そうしたら、そのときに、大田区公園課の係長がお立ちになって、「大田区には500の公園があります。500ある公園が、みんな同じような公園になってしまったのです。そろそろ僕たちは、違う公園がやりたいんです」とおっしゃったのです。私は、驚きました。行政が意思を持たないというのは、私は嘘だと思います。そのときに、やはり、どういう公園を作りたいか、というのを作る人が持ったほうが、いいものができるし、いろいろなニーズがあるのだったら、いろいろなニーズのものを作って行って、好みに合った所に行くような形になるのが、よりいいと思いました。

もう1つは、できてすぐのときに、公園のすぐ横におじさんがいたのですけれども、そのおじさんが、私たちが、子どもが作った泥のケーキか何かあまり上手にできたから、そのまましておいたら、「これは公園の私物化じゃないですか」というふうに言ってきたのです。これは、とても面白い提案だと思いました。私たちは、公園を私物化しているのだ、というふうな意識を持っています。私物化していない、というのは嘘です。「私の公園だ」と思っています。ただ、私の仲間も「僕の公園だ」と思っていますし、私の息子も「僕の公園だ」と思っています。私は、例えば今は30人かもしれないけれども、40人なり50人なり100人なりの「私の公園」になればいいと思っています。誰のものでもない、みんなの公園というのは、つまらない公園だと思っています。

○天野 誰のものにもならない公園というのは公園ではない、というのは、本当にそう思うし、とにかく使い手がその場面において主役になれることこそが重要であって、そのことで初めて自分のものにしていくことができるわけです。そういう人が増えてくれば増えてくるほど、そのことに対して、愛情だとか、自分たちが守っていくのだ、という意識が高まっていくわけで、それは、自治していくことの根本です。そういう点では、全く考え方は同じです。

ただ、プレーリーダーを置かないと冒険遊び場にならないか、それは、ひょっとしたらプレーパークには呪縛のように付いているのではないか、ということが下中さんから出た。その辺は、もう少し詳しく私の中でも検証したいな、と思っています。プレーパークの歴史的な経緯を見ていくと、プレーリーダーのような者をきちんと常駐させることでないと、あの活動を軌道に乗せられなかった、という事実は1つあると思うのです。とにかく前例がなかったというのが最大の部分で、あの公園を失敗させると次が続かない、というのがあったわけです。とにかく住民参加で公園づくりをするなどということは例がなかったわけで、しかも、それまでの住民と行政とのかかわりというのは、むしろ不信感のかかわりだったわけです。住民たちの活動は信頼が置けるのだという実践例としては、かなり貴重だったのだと思うのです。それがとりあえず軌道に乗っていて、そのことで行政がやれることの範囲が広がってきたというのは、やはりすごく重要だったのだと思うのです。

質 疑 施 答 交 見 意 換 意 意



それは、当時は積極的だったけれども、いまの下中さんの時点からすると、ちょっと消極的なわけです。

ただ、起こることを受けていくという状況だけではなくて、私たちは子どもたちに、ある面で、いろいろな遊びという展開を仕掛ける。それは、場合によっては、地域の許容量を一気に超えていく場面も出てくる。むしろ、そういうような摩擦を起こすようなことをやって、それで地域との対話をしていくテーマを突き付けていく、というやり方もするわけです。子どもの遊び場というのは何なのかとか、子どもが遊ぶということとは一体どういうことだろうかとか、そこに大人がかかっていることだとか、子どもを育てる環境というのは一体何なのだというところを、引きずり出してきたテーマの中で戦わせていくと。だから、割合、攻め手です。いつも攻めていくというところはある。プレーリーダーは、その攻め手をする上では、ここで言うと、非常に格好のファシリテーターであるのかもしれない。

○下中 住民だけでやっている、限界は確かにあるわけですが。この公園が3倍か4倍広かったら、手におえなかったかもしれないとか、いろいろな条件があると思うのです。オリジナルの世田谷の羽根木のプレーパークのプレーリーダーというのは、そういう経緯があって、切実に形成されていったと思うのです。けれども、私たち後発だとすると、これからやりたいと思っている人の中では、もうそれがすでに制度として作用している部分が、若干あるような気がしたのです。だから、プレーリーダーがいなければできないのではなくて、変なプレーリーダーが来たら嫌だ、と私は思ったのです。

天野さんなり、プレーリーダーA、B、Cというのは、制度としてのプレーリーダーではなく、やはり個人だと思うのです。だから、私たちが地域に住んでいるのと同じに、天野さんはたまたま地域に住んでいなかったけれども、世田谷プレーパークの地域の住人になるために、プレーリーダーという位置を占めているという、そういう感じかなと思っています。

くさばら公園でさえも、「こういう条件がなければ、できないわ」と言ってしまう人がいます。ほかの地域で作りたい人なんて山のようにいるのだけれども、こうでなければできない、というふうに、わりと思ってしまうのです。そうではなくて、自分の持ち札を見て、これだけの持ち札でやれることを考えたほうがいいと思います。

●吉川（防災都市計画研究所） お2人の話を聞いて、大都市での住まい方として大事な、人と向き合う、場所と向き合うことを実感しました。プレーパークや、くさばら公園が、周辺の街や人に何かにしみ出しているようなことがないでしょうか。

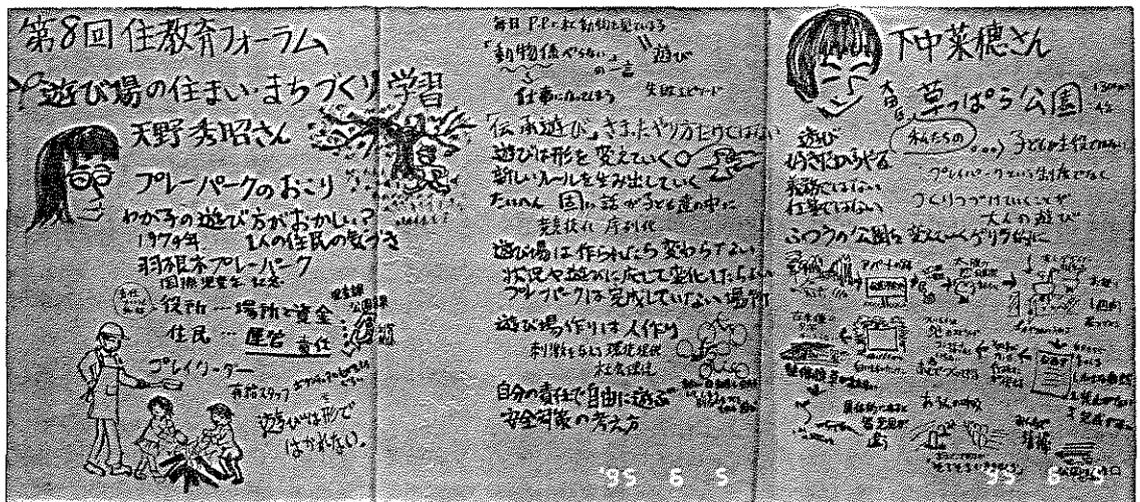
○天野 プレーパークをやっている、「自分の責任で自由に遊ぶ」というあの立て看板は、1つの事故をきっかけにして立てたわけです。あれを立てた当初というのは、やはりものすごく戦々兢兢々としていたのです。管理責任というものも明快にしよう、という動きが社会の中で潮流になっているときに、あえて危ないと思われるような遊具等も含めて設置をして、それで、なおかつ自分の責任でというふうに言うことが、どのような反応を社会の中に呼んでいくのか、全く予想できなかったのです。

当時、私は常駐をやっていたのですけれども、立ててから3年間ぐらいは、周りとの緊迫した関係というのを、肌で感じていました。

私が、本当に動いてきたな、というのを実感として感じるようになってきたのは、7年ぐらい経ってきてからでした。それまでは、けがをした子どもを手当てして医者に行くとか、家に連絡をしても、「そんなことは、管理しているあなたたちがやって当たり前」みたいに、責任を問わないまでも、思われていた節があったのだけれども、そのころから、向こう側から「ありがとうございました」というような、そういう感覚が出てきたのです。それで、ちょっと動いてきたかな、というのが感じられてきて、そのうちに、菓子折を持ってきてくれる人がいっぱい出てきた。今は、ほとんどそういう状況になっていて、プレーパークが出現したころとは雲泥の違いです。それが、さっきの事務所長の、長い公園生活の中で「うちの子の責任です」などというふうに言われたのは初めてだ、と知らせに来てくれた、ということなのです。

自分たちの暮らしは自分たちの手によって築いていくというような発想、さっき言った「自分の責任で自由に遊ぶ」というのは当たり前のことなのだけれども、その当たり前のことが当たり前になっていないということの中にこそ、現代の問題というか、ものすごく深い病理があると思うのです。

大体「自分の責任で自由に遊ぶ」と掲げたやつを、子どもに一生懸命読み聞かせている親がいるのです。私たちは、あれは漢字で書いていて、振り仮名は全然振っていないわけです。なぜかという、遊んでいてけがをしても、子どもは誰



▲木下委員と町田委員が描きあげたファシリテーションボード

も責任を問わないのです。自分が楽しく遊んでいてけがをした
たら、子どもは、自分が「しまった」と思うわけです。それ
を責任を問うて、問題にしてきて、子どもの環境を悪くして
きたのは、常に大人だったわけです。だから、あれは大人に
対して書いた文章です。子どもは読まなくてもいいわけです。
子どもにそんなことを知らせる必要はない。子どもは、とに
かく遊び切れれば、自分の中で責任を取る方法というのは、
確実に身に付けていくわけです。その辺のところを大人に対
してやっているのだという姿勢を、私たちはかなり明確に持
っているわけです。そういう点では、大人の世界に動きが出
てきたということは、子どもの世界にも動きが生じてくるか
もしれないというのを、片方では感じるわけです。

もう1つは、今あそこの遊び場の中でやられている、昔な
がらのベイゴマにしても面子にしても釘刺しにしても、最初
にプレーパークでやっていたころは、子どもたちは誰も知ら
なかった。でも、今はみんなやれるのです。来た子どもたち
が、お互いの姿を見合いながら伝承し合えるような状況とい
うのが出てきている。

子どもの中で遊びの選択肢みたいなものが広がって、それ
がわりと当たり前になってきた。珍しいことではなくなって
きた。それは社会全体から見れば珍しい話なのだけれども、
プレーパークに通える子どもの風景としては全然珍しいもの
ではなくなってきたということが、ひょっとしたら、いちば
ん大きな変化なのかもしれません。

子どもの遊びがおかしくなったという指摘がされてきてい
るのは、昭和30年の頭ぐらいなのです。プレーパークが生ま
れたのが、昭和55年ですね。1度壊してしまった森林を再生
するには100年かかるといえますから、20年以上かけてぶっ
壊してきた子どもの遊びの文化というのを立て直すには、ど
んなに少なく見積っても同じ時間はかかるだろう、というふ
うに思っています。それをもっと短縮しよう
とするのであれば、強引に大人たちが自分たちの手元に子
どもを引き寄せなければいけなくて、逆に、これ自体が本当
に遊びといえるだろうか、という辺りに疑問が残ったりもする
わけです。

大人たちは何も子どもの遊びの文化に手を下していない、
ということ言うけれども、大人の社会の変化そのものが子
どもの遊びの文化を全部奪ってきているわけだから、明らか
に大人は子どもの遊びの社会に介入してきているわけです。
その点では、大人が子どもの側に手を加えるというか、手を
かけて、子どもの立場から大人の側に「これ以上自分たちを

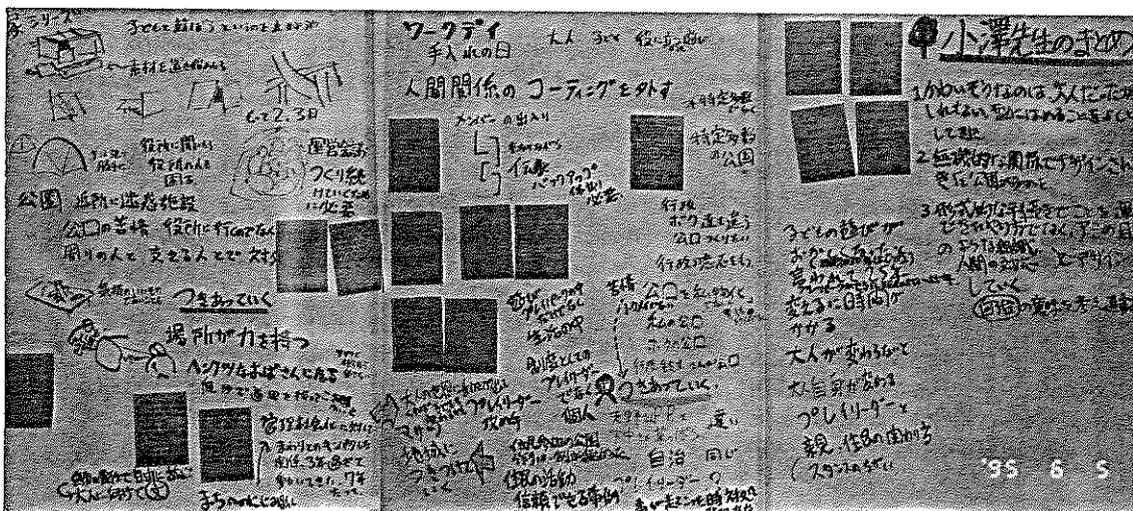
いじくるな。やりたいようにやらせてほしい」と。ある面
では大人が防波堤になって止めておかないと、大人の社会の
荒波をこれ以上まともに子どもにかぶらせておいていいもの
だろうかというのが、私たちのいちばん大きな部分なのです。
放っておくと、かぶらせる結果になりかねない。たぶん、プ
レーパークのおかあちゃんたちとか私たちがどんなに言っ
たって止まらないくらいに、大きな流れの中で動いている。だ
から、私たちは、遊び場を維持するというところだけをやっ
ていればいい、とは全然思っていないのです。

むしろ遊び場をあそこの中で守ろうとすればするほど、場
として固定していかざるを得ない部分がある。遊びをやりたい
ならプレーパークに行きなさい、ということが出てきてしま
うと、これは本末転倒になってしまう。遊びそのものは、
生活の中にあっという間に消えていってしまう。遊びそのものを子どもたち
の生活に返していこうというような動きのためには、むしろ
場を固定して考えてはならないわけです。

私たちは、そこを表現の場としてとらえていて、その表現
の場をどういう形でメッセージしようとしているのかという
のは、あらゆる機会に、あらゆる場面の中で、むしろ社会の
中に打って出るというか、大人たちと、いろいろな場面で
ディスカッションしていくことです。これは子どもにはできな
いことですから。

○下中 天野さんたちのやっていることと、くさっぱら
公園のことというのは、志は同じだと思うのです。ただ、ス
タンスが若干ずれている。お互いに同じことを達成するた
めに、違うスタンスでやるのが重要なのではないかと思うの
です。天野さんは、子どもにできないことをやるのだ、とい
う気持ちがすごくお強いんですね。確かに私も、それは必要だ
と思うのです。ただ、いま私がくさっぱら公園でやろうとし
た状況では、それを私自身がやれなかった。自分自身の息子
もそこに混じっていることとか、自分がほかの仕事を持っ
ていることとか、いろいろなことでそういう人材がいなかつ
たわけです。けれども、要するに、それでもやれる方法とい
うものを何とか考えてきている、ということだと思ってい
ます。それで編み出した方法というのは、子どもができないこ
とを大人がやってあげるのではなくて、大人自身が変わろう
ということなのです。

○天野 プレーパークにかかわっているおかあちゃんた
ちは、みんな下中さんたちと同じわけですね。みんな仕事を持



っていたりとか、生活を持っていたりしてかかわっている。私は有給でやっているから、当然そういうことを運動としてやることを、自分の職業の中にきちんと置いているわけです。だけど、プレーパークがプレーリーダーの有給化、有償化というものを目指したのは、ある面では自分の地域だけで止めておいてはならないという、どちらかという運動性といったほうがいいのかもしいけれども、その運動性に強烈な意味を持たせようとしたところがあるのだと思うのです。

●木下 メンバーについて、「入る、出るという変動があると思うのですが、どのように対応していますか」という質問があります。例えば先ほどの鈴木さんですけれども、行政担当の異動もあります。そういう人の変動については、いかがですか。

○下中 大田区の場合は建設と管理がすごくはっきり分かれています。従来は、建設してしまった人は管理にはかかわらないので、それは本当によくないことだと思います。鈴木さんは、何かあると相談に乗ってもらえる相手として、建設にずっといました。けれども、今回異動しました。管理所長も、3代ぐらい代わりました。鈴木さんが仲立ちをしてくれたのだと思うのですが、わりとスムーズに管理所長とは受け継いできました。はっきり言って、運営会議というのは行政の中では位置付けられていないと思います。何だかわからないけれども、今度所長になったら、こんなところに行かなければいけない、という程度で来ているのだと思います。そういう関係がいいとは思っていません。いいとは思っていないけれども、それを急に替えることは、さっきの子ども遊びがすぐには戻らないのと一緒に、なかなか無理があると思っています。だから、それは懸案事項で続いていくと思います。

望みとしては、フィフティ・フィフティになりたいと思うのです。ベッタリ行政の下に入るとか、行政からお金をもらってしまうとかいうことも、あまりしたくないと思っているのです。もし私たちが行政からお金をもらってやっていたら、たぶん周囲の人から、「あいつらは、お金をもらっているからやっているんだ」と、行政に対するのと同じ態度で出てくるのではないかと思うのです。お金のことだけではないのですけれども、もらうお金の種類と額というものをすごく用心深く考えて、行政とは付き合いたくないなと思っているのです。

メンバーは、正直に言うと、そんなに爆発的に増えません。集団を作ることにエネルギーがかかってしまうと駄目だな、と思い始めた。最近では、無理に増やそうと思っていない状況です。それでやっつけけるペースでやっている、ということなんです。

○天野 もう10数年だから、随分変わっていますけれども、少しずつ携わっている人たちの間で伝承し合って、今のところはうまくいっている。でも、基本的には、たぶん心もとないと思う。住民同士の伝達のし合いというのは、みんなやりたくてやっているわけだけれども、それまでずっと長くやってきたり、中心になっていたりした人たちがゴソッと抜けるなどということがあると、一気に弱体化するかなという不安は、やはり拭えない。商売でやっているわけではないというか、職業にしているわけではないから、そういう事態がないとは言えないわけです。だから、その辺のところは、プレーリーダーが弱いときには住民たちがプレーリーダーを支える、逆に住民たちのパワーが弱いときには、プレーリーダーがきちんとそれを後押しできるというような関係を、早く築いていきたいというのは1つあります。

もう1つは、それぞれのプレーパークの中で、いま3者でネットワークを作って、世田谷プレーパーク連絡協議会というのを作っているのですけれども、どこかのプレーパークで弱い部分というのが出てきたときに、ほかのプレーパークのメンバーたちが支えに入れるようにしているのです。この関係が、いま相当出来上がってきている。

やはり波というのはありますから、その波が来たときに、その組織を支えていく部分がここの本体しかない、持ち堪えられないときがあるかもしれないというのは、すごく思い

ます。そういう事態を常に想定して、バックアップ機構というのをどういうふうにしていくか、ということをやっています。

○下中 私たちは、弱くなったときは、弱くなった状態でやるやり方をしている、という感じでしょうか。最底線というのを一応確保しておく。いつもハイパワーというのは、絶対無理なわけです。だから、弱くなったときは無理をしないで、お掃除だけして、

こういうのもちょっとお休みする。でも、そのうちにパワーというのは回復するでしょう。そうしたら、やる。

○天野 それは、たぶんまだ大波が来ていないのです。何か休んでということではなくて、停滞したときには、住民たちが盛り上がっていたがゆえに堤防で止められていた周りの声が、一気に雪崩れ込んでくるということがある。そうすると、弱いところにそれが来てしまうと跳ね返せなくなってしまって、その場が維持できなくなっていくということに、つながりかねないときがあるということなのです。

○下中 あるかもしれませんがね。ただ、そういうことは経験しないと、きっと千差万別だし、わからないから、くさっぱらの場合は、あまり転ばぬ先の杖は打たない方針です。



小澤生のまとめ



◆かわいそうなのは大人だったのかもしれない、型にはめることを良しとしてきた

たぶん、ある年齢以上の人は、公園のない所で育ったと思います。私自身も、そうなのです。それでは、どこが遊び場だったかという、周りの空き地だったり、私は北海道の旭川生まれなので、石狩川が遊び場で、そこで、何とサケではなくてメダカをすくって遊んでいたのです。そんなことができた時代の子どもと、いまの子どもを比べると、やはり私は、いまの子どもがかわいそうだという目で見てしまう。しかし、いまのお話を伺ってみてもわかるように、かわいそうだったのは大人だったのではないかと思うのです。そういう何でも型にはまるような、キッチリした枠組みの中に収まるものを作ることを良しとする空気を、日本全体は作ってしまった。今日のお2人は、遊びを通して、子どもの発達、あるいは人間が居心地がいいということはどういうことなのか、ということをお話して下さったのではないかと思います。

◆無機的な関係でデザインされてきた遊び場が多かった

2つ目に、遊び場のデザインということは基本的には人づくりで、人と人との間をどうデザインするかとか、人と場所との関係ということなのに、そういうものが、あまりにも無機的な関係の中で作られすぎたのではないかという気がします。私も一応建築を学んで、都市計画をやってきたのですが、一体大学で学んできたことは何だったのだろう、という意味で、教育のあり方も含めて、もう1度考え直す必要があるのではないかと、いうふうにお話を伺いながら思いました。

◆形式的な手続きでなく、網の目のような組織、人間の対応でデザインしていく

それから、やはり欧米でも同じだと思いますが、こういう遊びをやるにしても、組織、あるいは人と人との関係というのが非常に大事なのです。でも、どうも日本というのは、今回の都市博の関係にしても、形式的な手続きで事を運んできたという問題がある。天野さんには、自治の根本に触れるようなことを、今日おっしゃっていただけたのではないかと思います。いままでは、あるべき目的があって、その手段はどうあるべきか、ということやってきたわけですが、そうではなくて、もっと網の目のような組織とか、人間との対応というものが、行政のほうにも求められるし、住民のほうにも、大人の関係が作れるような距離を保てるような環境の中で、場を作っていく、街を作っていく、自分たちの生き方をデザインしていくということが、今回のお話の中にあっただのではないかと思います。

◆自治の意味を考える

そういう意味で、私は、この遊び場づくりやプレーリーダーを通して、今一度、基本的なところに立ち返って、自治という意味を考えるべきではないかというふうに思いました。

機会がありましたら、また、皆さんからもいろいろご体験をお話していただいて、より素晴らしい関係づくり、あるいはデザインということに対して、日本人がいちばん不得手とするような哲学を、焦らずに、大らかに作っていかれるのではないかと、いうふうに思っています。今日は、どうもありがとうございました。

第9回 住教育フォーラムのお知らせ

テーマ
英国における住環境学習の現状と展望
-住まい・まちづくり学習のアート化の試み-

今回の住教育フォーラムは、アイリーン・アダムスさんをお迎えして、イギリスの住まい・まちづくり学習についてお話をうかがいます。

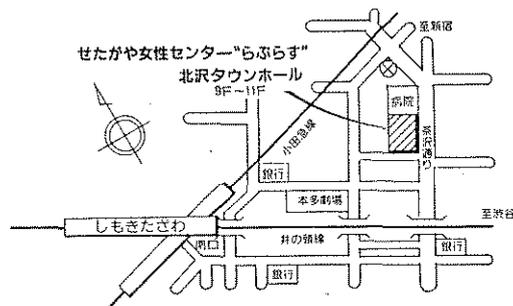
アイリーンさんは、1970年代よりかの国の、子どものための楽しさあふれた住環境学習を、学校教育の中で実践してこられました。身近な環境を素材にしつつ、環境が育む子どもの感受性を触発する力を生かし、子ども自身の個性的な視点やセンスを生かしてこられています。いわば、人間・環境の相互浸透関係のデザインワークのベテランのお話を、スライドを交えてわかりやすく語っていただきます。

また、このテーマが現実の公教育においてどのように機能しているのか、そして、教師、プランナー、自治体がそれぞれどのような役割を果たしているのか等にも議論が及ぶでしょう。 <住まい・まちづくり学習のアート化の試み>をお楽しみ下さい。

記

- ・日時 1995年9月26日(火) 18:30~21:30
- ・会場 せたがや女性センター「らぶらす」研修室(北沢タウンホール内11階)
*地図参照
- ・講師 アイリーン・アダムスさん(通訳がつきます)
- ・コーディネーター 熊本大学工学部教授 住総研住教育委員会委員長 延藤 安弘
" 東京学芸大学教育学部教授 " 委員 小澤紀美子
- ・ファシリテーター 千葉大学園芸学部助手 " 委員 木下 勇
" 筑波大学附属小学校教諭 " 委員 町田万里子
- ・記録 跡見学園女子大学短期大学部助教授 " 委員 加藤 仁美

*参加は無料です。参加ご希望の方は、ご所属、ご氏名、連絡先を明記して、下記財団「住教育フォーラムの係」までファックスで、お申込下さい。
締切 9月23日、先着70名
お申し込みのない方は、お断りすることがあります。



小田急線、京王井の頭線下北沢駅南口より徒歩5分

財団法人住宅総合研究財団
TEL03-3484-5381 FAX03-3484-5794
担当 間宮、小菅、平井

※会場、申込み方法が通常と異なりますのでご注意ください。

住・まちづくりフォーラムかわら版(仮題) 8
1995年8月25日発行(非売品)

発行人 大坪 昭
発行所 財団法人 住宅総合研究財団
〒156 東京都世田谷区船橋4-29-8
TEL03-3484-5381 FAX03-3484-5794
事務局 間宮 昭朗、小菅 寿美子、平井 なか

